

最後の夏を前に

会員 北村 岳士

1 6月、都内で「江原会」のイベントに参加した。

「そんな会派あった?」、「どのエハラさん?」などと考えられる方がいるかもしれない。

私が参加したのは、「江原会（コウゲンカイ）」＝「熊本高校（クマタカ）の同窓会」。要は、母校の同窓会に顔を出しただけである。上京し、初めて参加したが、旧制中学時代の大先輩から高校を卒業したばかりの平成生まれ（!）まで総勢800名近くが一堂に会し、故郷の経済を一身に背負うくまモンが踊り、進行役をNHKのアナウンサーが務めるなどして、大盛況のうちに幕を閉じた。

盛況の要因は、もちろん幹事学年の先輩方が入念な準備を重ねられたことにあると思うが、「どこ高ね?」から会話が始まると言われる程、高校の結び付きが強いとされる県民性の表れと見ることもできる。あるいは、ただ単に集まって飲むのが好きな県人気質によるものだと言われれば、それ以上の要因はないかもしれない（かつて大阪では、阿蘇から御堂筋へ馬を呼び、地元の例大祭（肥後の馬追い）を披露していた時期もあった）。

2 その前日は、「江球会」（コウキュウカイ）。こちらは、母校野球部の同窓会である。6月中旬という

タイミングで開催するのは、3年生にとって最後の夏の県予選大会の必勝を期し、甲子園出場を祈願するためである。ビールが美味しい季節になってきたからではない。

「ば！（熊本弁で驚きを表す感嘆詞）多良木が第1シードたい」、「ピッチャーんたいぎゃよからしいけんね（ピッチャーがとてもいいらしい）」、「勝ったらまた文徳ばい」など、たった1枚のトーナメント表

にも話題は尽きない。ひとしきり盛り上がった後、現チームの練習試合・公式戦の戦績等が紹介される。県外の強豪校との練習試合のセッティングにはOBの先輩方にご尽力いただいていたそう。そして、練習用具等の支援を確認し、最後には皆で校歌を歌い、後輩たちに一球入魂のエールを送る。

3 現役の頃は、恥ずかしいことに、ただ目の前のことに必死なだけで、練習や試合環境を整備してもらい、また先輩方をはじめ周囲の熱い思いに支えられているという自覚に乏しかった。恵まれた環境下でプレーできていたということは、引退して年齢を重ね、少しずつ視野が広がり、だんだんと分かるようになった。ややもすれば、つい目の前の課題や提出期限に追われがちな今日この頃、後輩たちの最後の夏を前に、改めて、周囲の人々やまだ顔も知らない誰かに支えられて今を生きているということに感謝する2日間であった。

4 社会人としてはまだまだ新入部員。お世話になりっぱなしの毎日だが、少しずつでも誰かを支えられる人となれるよう、日々を過ごしていきたい。

その第一歩…とまでは言えないが、つい先日は、故郷のJリーグチーム存続支援にも繋がることから、サポーター有志の方々が集う、スポンサー企業主催による地元焼酎の飲み方講座に誘われて参加した。

決して、焼酎も美味しい季節になったから参加したわけではないことを申し添えたいが、「結局、ただ飲んでいただけなのは?」という厳しいお言葉は真摯に受け止めたい。